

「安らぎのない街で」 ——90年代のアルケオロジー

アイソレーションズ¹
(多田&井坂、考える輩たち)

90年代前半というお題。また、この新たな場をどんなふうに使っていくか、誰に入ってもらうか、いろいろ考え出すと難しくなるので、あまり深く考えず、とりあえず身近な話題から始めてみようと思います。それに、井坂さんと始めたのだし、「アカデミックにこだわらない」ことと、当時の「早稲田」(私大・都心←つまり今の一橋・国立大教員の立場をあえて抜ける)、「若者だった自分」という経験レベルから始めるのがよいかと思っています。今日井坂さんと喫茶店で話したのも、そういう点だったので。

まあとりあえず、いまとの比較から入っておくと、(1) 良くも悪くも、「まとめ」られていなかった。(スマホ・パソコンがなかった。モール・コンビニ・駅ビルはあったけど、近年レベルまでに徹底した力を持っていなかった。) 統合されていなかったのは、今の裏返しで言えば、ゆるさ、自由さでもあった。(2) まだまだリアルに、「昭和」的なもの、「アナログ」的なものを、たくさん残していた。平成に入っていたし、デジタル化も進んではいたけれど、まだ前時代からの連続性が、直接残っていた。

まだ抽象的な言い方ではありますが、話が進むにつれて、具体例やエピソードをいろいろ出していければよいかと。(今との比較の視点も一長一短、それなしで当時をダイレクトに振り返るほうがよいのかもしれないけれど、今の視点を封印するのも、それはそれでなかなか難しい。)

90年代の風景

井坂 あのとで思い出すのはたばこの匂いですね。小さい頃からですが、ふとたばこの匂いがしていました。「あ、どこかに大人がいるんだ」と思ったものです。たばこというと駅での光景が目には焼き付いています。電車を待って並ぶ大人たちは一様にめがねをかけていて、同じ角度で新聞に目を落としています。右手の先にはたばこの煙がたゆたっています。吸い殻はどうするかというと、線路に投げるのです。みんな同じように吸い殻は線路に投げていました。あるとき線路を見下ろしたら、鉄路の土手のところに黒い吸い殻がびっしりとはりついているのに慄然とした覚えがあります。

それと、私は「昭和的演出」と呼んでいるのですが、平成になっても、下手をすれば今でも私たちは昭和的演出に縛られていると感じます。芝居でいえば台本なんかは意識の世界なのですが、演出はどちらかというと無意識の反映なので、時代が変わってもなかなか追いつかないのだと思います。「昭和的演出」の具体例は追ってお伝えしたいと思います。いっぱいありますので。

¹ 「アイソレーションズ」という名前は、多田が学生時代、井坂さんと二人で音楽を演奏していた時のグループ名に由来します。「孤独なものたち」といった意味でした。

多田 いやあ、さすが、たばこの件、着眼点がすばらしい。「ヒストリカル・エスノグラフィ」とはこのことかと思うくらい、細やかでリアルな描写で、驚きました。たしかにあの頃は、たばこを吸う人が普通にいっぱいいましたよね。あの人たちは一体どこへ行ったのだろう、と思うくらい。

井坂 多田さんは当時からたばこは吸わなかったですね。90年代の原風景みたいなもので、記憶しているのはなんですか？

多田 うーん。なかなか難しいね。90年代なのか、東京なのか。西新宿の高層ビル街を歩いた時の衝撃と、渋谷のスクランブル交差点の圧倒的な人並みの衝撃。巨大なものと、古いものとが混在している東京の街の風景かな。やっぱり、早稲田の街。学生街としての早稲田は、やっぱり好きだったねえ。大隈通の飲食店、早稲田通りの古本屋通り。猥雑さに自由さと、癒しを感じた。いつまでもこの時間が、続いてほしい気持ちがあったね。

そうですね。私は埼玉の出身なのですが、東京はとても遠い場所という印象でした。今でこそ半蔵門線で渋谷に一本で行けますけれど、当時は渋谷はどこか遠くにあるユートピアという印象でした。大学に入って印象的だったのは、建設中のビルです。鉄骨が組み立てられた頂上にクレーンが放置されていて、第二学生会館から見る新宿副都心はビル上のクレーンがツンドラの針葉樹林みたいに見えたのを覚えています。

時々言われますけど、当時はTシャツはジーンズなんかに入れていました。いわゆる「イン」です。ごく当たり前でしたし、誰も疑問はもちませんでしたね。当時の写真を見ると例外なくインです。もちろん、多田さんの写真もそうですw

多田さんとは早稲田で会ったわけです。早稲田は90年のあたりでは学生文化としては最も発信力のある場所だったと思います。18歳人口が200万以上いて、いくつも大学を受験しても受からなくて、しかたなく専門学校に行く人がいた時代でした。私大では早稲田は大人気で、予備校では早大～を銘打った講座が山のようにあって、飛ぶように売れていましたね。そう、多田さんとは代ゼミでも先輩後輩でしたw

代ゼミ。忘れたとは言わせませんよ笑

代ゼミの話をしましょう。あの文化は永遠に失われてしまいましたから。記録するに値すると思います。大阪校でしたね。私は代々木本校でした。好きだった先生は誰でしたか。

代ゼミは大盛況だった

多田 代ゼミ！直球ど真ん中くるねえ（笑）あれこそ私の原風景。今の講義スタイルのモデルにもなっている。知的生活の原点です。

代々木本校だったのか！埼玉から通っていたわけでしょう。大変だったのでは。やっぱ、田村の現代文。論理的思考とはこういうものなのかと。現代文の神様でした。大阪校はたしか、3年目。国立クラスより、早慶上智クラスのほうがいい、看板の先生を投入していた。人数が多いし、地元予備校に勝つためだったはず。

井坂 田村の現代文、私も受けていました。いわゆる憂鬱質のタイプで、めったに笑わない、トーンは一本調子、けれども、言葉そのものの力で人の論理的思考をこじ起こして回転させる人だったと思います。当日の現代文は陰の田村、陽の酒井という感じだったと思いますね。私はどちらかといえば酒井派でした。田村の味がわかるにはいささか幼すぎましたね、私は。

多田 三木さんも、酒井の授業を受けていたらしいね。僕は参考書か問題集でお世話になったはず。出口の現代文、司一哉の現代文・小論文。マドンナ先生・荻野の古文。滝山の英語、徳重の英語。岡本の日本史。土屋のサテライン古文。上出とも共有部分が多いのだけど。

あふれんばかりのパワー、エネルギーが、講師と教室にみちあふれていた。高校の授業のしょぼさを悟ったものです。大学の授業に期待して、ガクッと失望したのも、予備校とちがっていたからだったのでしょうか。先生の話術、雑談に魅了されていたのでしょうか。解き方や論理的思考も、もちろんだけど。

それと、Tシャツのイン！鋭い指摘だね。あれは、時代的な移行だったのか。妻にはいつも、「シャツはズボンの中に入れないように」と、何回も注意されていたのだが。

井坂 そうそうたる顔ぶれですね。私は英語は潮田五郎、鬼塚、西谷、古文は土屋、国広、日本史は前田で、時々菅野の授業にもぐっていました。

今代ゼミを一言で言えば、「武器を与えてくれた場所」、あるいは「武器庫の場所を教えてくれた場所」と言っていきたいと思います。ご指摘のように、高校時代の教科書は水鉄砲みたいなもので、知の戦場ではまったく役に立ちませんでした。現実には野戦ですから、野戦なりの戦い方、守り方があるのだと実感しました。

特に代ゼミは先生に左翼崩れが多かったのもあるかもしれませんね。挫折した理想主義者たち。彼らのもつ内面的屈託が、とても高い教育効果を結果として持ったのだと思います。

しかし、いきなりアイソレーション節、炸裂ですね笑

左翼崩れの「大人たち」

多田 いやあ。早稲田も代ゼミも、封印して、記憶を抑圧させてた面があるのだよね、国立大教員の立場上。(笑) このページのメンバーに誰を入れるか、慎重にもなるわけだ。

井坂 そうですね。この場ならいいでしょう。それにあの頃のことは誰かが書いておく必要があると思います。

多田 あの頃は、左翼崩れの大人や先輩が、そこかしこにたくさんいた気がするね。懐が広くて、いろいろなことを教えてくれるような人たち。

井坂 バブル後の数年、どんな時代だったのか。どんな風景を目にし、どんな空気を呼吸していたのか。今だから理解できることもあります。

あの頃ははっきりとインテリは左だったのです。というか、心ある人は左でした。まだ戦争で傷ついた大人がたくさんいましたから。

今より左を選択するコストが安かったですね。今左であることはけっこう覚悟が要ります。

多田 うん。当時も、セチガライ世の中を生きてる感覚が強かった気がするんだけど、いま思えばまだ優しいというか、ユルさに取り巻かれていた気もするんよね。早稲田の街の温かさなのかもしれないけど、キャンパス内では疎外感というか、学部の人たちとは何だか、話や感覚が合わないものを感じていた。だから居場所を求めて、第二学生会館へ足が向き、フォーク村に行ってたような感じでした。

左が、ある種の良識として、まだ通用しえた時代だよね。2000年代に入ってもしばらく

はまだ、そうだったような気もするんだけど。

井坂 疎外感ですね。疎外感ほどマージナルな知性を育ててくれるものはないかもしれません。フォーク村には育てていただきました。いや、多田さんに育てていただきました✦

多田 うん。まあたしかに、私や井坂さんのタイプって、政治経済学部にはあまりいないようなタイプだったかもしれないね。フォーク村内でも、それぞれ独特だったのかもしれないけど（笑）

環境的には、ピッタリだったよね。生協書店と古本屋、図書館が充実していて、授業がゆるくて自由度が高い、という。（笑）もう読みまくるしかない、という。読みまくっていたら、もうひとり近くに、読みまくっている者がいた。

早稲田の教授たち

井坂 でも政治の話はけっこう好きでしたね。よくお話しした記憶があります。というか、政治についての基礎的な概念は多田さんから教わりました。政治学の授業って私には面白くなかったです。機能的にとらえすぎてて、現実感がなかった。

多田 知的生活に政治の議論は、オカズのような感じでしたし、自由さの象徴のようなどころがありました。図書館前で缶コーヒーを飲みながら、というのが、最高の贅沢。

たしかに。あの頃の政治学の授業は、どうしようもなかったねえ。だから僕は、思想に走った。

井坂 内田満先生の政治学原論、人柄はいいのですが、面白いとは思いませんでしたね。それをいえば理論経済学は輪をかけてつまらなかったですが。

多田 やっぱ、川勝先生の経済史。経済地理学も、なかなかよかったな。

井坂 奥田の経済地理学ですね✦あれは愉快でした。あるときなぜかズボンのおしりが破けてたことがありました。奥田先生の。

多田 ほう～。夢中に取り組んでた証拠ですな。

井坂 多田さんに勧めていただいた授業を受けてましたね。私は自称多田ゼミ 0 期生です
ので☺

女子大の文化祭にもフィールドワークで潜入しましたし✦参与観察もいっぱいしました。

多田 うっ。多田ゼミ 0 期！ 授業、すすめたのだから。参与観察、たしかにいろいろした気もするね～。都心の地の利、いま思えば恵まれてたもの。

井坂 大学に入って、歌舞伎みたいに、舞台が大きく回転した気がしました。地元には多田さんに似た人さえいませんでしたから。思想を意識して生身の生活を営んでいる人がいませんでした。ましてそれをあえて言語化しようとする人も見たことがありませんでした。もちろん大学にもそんな人ばかりではありませんでしたが、正しい意味で知性を持つ人にふれられたのは本当に恵まれていたと思います。

今考えれば浪人できたことも恵みでした。学ぶ楽しさは予備校が教えてくれた気がします。浪人生活を終えたとき、読みたい本がたくさんあったのがその表れだったように思います。大学に入ってから大量の宿題をこなすように読みたい本を読んでいった記憶があります。多田さんも予備校時代の大切さをよく言われますね。多田さんを形成していくうえでの、なんというか、酵母みたいなものを得た時期だったのでしょうか。

懐かしい快さ

多田 1年間の「余分な時間」というのが、貴重だったわけですね。今は親の立場、「出資者」の立場で考えてしまうのだけでも（笑）、当時は講習にも湯水のようにお金を投入していたわけだけど、それを自分のものにできた実感・自負がありました。学習・学力と人生訓が、一体になって成長できた感。

なんだかやっぱ、自分の生活・経験から話を展開していくのが、一番よさそうだよね。近々別のスレッドでは、私の当時の歌詞をアップして、その内容や表現をネタにしながら、話を広げ、深めていくやり方も、ありなのかなと。そればっかりでも困るけど、いろいろある中のひとつのやり方として。（笑）

井坂 原点は歌詞ですね。もちろん幹に当たるものです。そこからいきましょうか♪

多田 了解です。大1でつくった10曲から始めるのがよいと思います。うち半分は恋愛がテーマ。恋愛を通して自分や関係、世界を語るのが、あの頃の黄金コースだったように思います。残り半分が、東京、大学キャンパス、社会批判、自己反省、といった感じでしょうか。歌詞のフレーズを分析する中から、よりいろいろな話題が展開できるはず。いま、歌詞集のある場所から離れたところにおり、明日以降もどるので、準備がととのい次第、また小出しにしていけますよ。

井坂 パーフェクト&ビューティフル✧間違ってもここに奥さまをご招待しないようご留意を☺

多田 もち、わかっておる。同人誌はおろか、例の単行本すら、チラ見したのみ。（遠い目）

井坂 若さのエネルギー源に愚かさはなくてはならないものの一つだと思います。そもそも愚かでなければ恋愛も歌もおもしろくもなんともありません。90年代を振り返るにあたって、その部分は魅力の源泉であり、創造力の原点ではないかと思います。

先般三木さんに会ったとき、最近では AI とかで、あらゆる体験を映像的に処理できるのだとおっしゃっていました。旅行も大学の授業も。きっとそれにとってかわられるのだろうとおっしゃっていました。けれども、「昨年さ、合宿でさ、多田くんの歌を聴いたとき、何とも言えない、懐かしい快さを感じたんだよね。ほんとうに、それは何とも言えないものなんだよ」と。

それはきっと、あらゆる雑なものを含む、時には無駄なものを含む一切のものを人生という大鍋で煮込んだときに出てくる、独特の気迫みたいなものだと思います。

今 50 歳を前にして、その部分を、歌を通して徹底的に振り返っていくことは、後半の人生にとって、とても意味のあることだし、そのことを知りたいと思っている人も世には多くいると思います。最終的な成果物が本にならなくてもいいと思います。それでも、記録に残して、いつでも参照できるようにしておくことには、個人的な感傷を越えた意味を感じます。

多田 どうもありがとうございます。本当にそう思います。月・火がゼミの日で、12月には修論・卒論が佳境の時期なので、読むものに追われてしまっていました。再開、やりますよ。三木さんの AI のお話、興味深いし、「昭和的演出」ともつながりますよね。振り返ると、たしかにそのところの激変は大きいんだけど、むしろこの 30 年を、連続性でもって語ることは大切なのだらうと思っています。その意味で、ひたすら活動と立場をキー

ブしてきた羽生さんという人は、指針を与えてくれるように思います。

井坂 本当にそうですね。もしかしたら、思う以上にすごい意味を持つ取り組みなのかもしれない。そう思えてきました。

名曲「安らぎのない街で」

多田 あったー、ありました！
まずはやっぱ、この曲から。「安らぎのない街で」1990年7月の作品です。どや？ いかが？

現在、明日の授業とのからみなどから、頭が江戸時代。追って随時、本人解説加えます！

大学1年の時だけで、オリジナルの曲を12曲つくりました。内訳を数えてみたところ、純粋なラブソングは4曲。思ったより少なかったのですが、それ以外の8曲の中でも、2番などに恋愛が入っているのが5曲あり

ました。これは、私が「恋多き人」ということでなく、恋愛が当時、コミュニケーション・ツールだったことを表しています。そもそも歌の歌詞というのは、たとえ実際にモデルになる人物がいようと、作ってしまえば一種の「理論的構築物」になるので、実際の恋愛とは別物です。だから本来的には、私は妻に気兼ねをする必要はなく、堂々とやっていこうと思っています。(笑)

その中でもこの曲「安らぎのない街で」に出てくる「君」は、最も純粋に、モデルとして対応する人物のいない「君」です。東京デビューして3か月、「君」と呼ぶべき人がいない段階で、心の空白を埋めるような気持ちで、「ああ 君がいまほしいんだ」と歌い始めるのですね。

井坂 多田さんの作品で最も好きなものの一つです。

多田 ようやく解説・コメント加えました！お手すきのときに、よろしく願います！

井坂 ぱっと見て感じる印象的なワードは、シュプレヒコール、エゴイズム、システムといった外来語かと思います。いずれもどちらかというと温かな感情を表現するものではないように思います。25年たってやや日常語からは離れた印象のあるワードですが、そのあたり、いかがでしょうか。

多田 たしかに。シュプレヒコールは当時、キャンパスにもまだ普通にあり、たびたび行われていました。エゴイズム、わがままさには、東京へ来る前、高校時代から憤っていた。憧れの東京に出てきて、その大きさと人の多さに圧倒されながら、その利便性と豊かさを享受しながらも、「安定のシステム」と向き合ってたテーマにしたい、そういう思いを込めたのだと思います。「豊かさ」というのも、今ではめったに出てこないけど当時はよく出てくる重要なキーワードでした。

Date

安らぎのない街で

C D G G
あ あ 君がいま欲しいんだ D Dsus4 D
あ あ 空気のかわいたこの街で Bm
取り残された君と僕 Dsus4 D
やさしさ一つにしたいよね
あ あ 二人を支えたい D Dsus4 D
あ あ 孤独のはびこる東京じゃ Bm
豊かさの洪水に吸い取られ C
生きる意味も 消えてしまうから G Gsus4 G
いつわりの平和を 唱えるシュプレヒコール G G7
今も呼びかけの音が流れる一方で G G7
不安におびえたエゴイズム しがらみに流されて Em7
どこかの争いのもとに笑顔が作られたこの国 G G7
今は安定のシステムの中で 目的もなく争い G7 FG
除外されて行く者達 もう立ち上がれない Em7
あ あ 君がいま包みたい Gsus4 G
あ あ 安らぎのないこの街で Em7
もう無理な笑顔は浮かべないで F
そのままだを寄せ合って Csus4 C
静かに君を寄せ合って C Csus4 C Csus4 C

井坂 なるほど。エゴイズムはそうかもしれません。ただ、当時もすでに口にする人はかなり少なくなっていたように感じます。たぶん学生運動の頃 60 年代に主流だったのではないのでしょうか。特にシュプレヒコールは。

「どこかの争い」は、朝鮮戦争のことだ当時おっしゃっていましたね。もちろん象徴的な意味だと思いますが。

多田 そうです。敗戦後の貧困から抜け出すうえで、やはり大きな契機になったのだらうと。このあたりは、社会的・政治的な学習の場所が、予備校の後、大学に入っていくなり、ごぞんじ某セクトから受けたインパクトが、あまりに大きかったのですね。学生運動の残り香は、当時のキャンパスには根強く残っていた。合わせて根強かったのが、オウムや幸福の科学、原理、「血をお清め」など、いくつもの新新宗教。どちらの潮流にも翻弄されかけた私は、地方から出てきたてでもあったし、恰好の洗脳対象だったわけですね。(笑)

いろいろな矛盾や問題を、ストレートに言葉にして歌にしたい、そういう思いを歌詞に表したのだと思います。政治・運動のところは付け焼き刃ですが、「孤独のはびこる」「豊かさの洪水」「生きる意味」「不安におびえたエゴイズム」「笑顔が作られた」「安定のシステム」「目的もなく争い」などが、より切実な問いだったように思われます。その思いを、「君」という二人称の存在を持ち出して、最初と最後にサンドイッチすることが、生活目線でリアリティを持たせる手立てだったのですね。社会の抽象的な問題にアクセスするうえで、恋愛モードから立ち上げることが必要だったわけで、吉本隆明の共同幻想論における「対幻想」。そこからのアプローチです。

対話装置としての恋愛

井坂 とても感動的な着眼ですね。恋愛という装置を利用しておられたのですね。確かに君というのは二人称ですから、プラトンの対話みたいに、一度設定すればどんどん自我が展開していくという。さすがです。

詩が全体に凝縮されていて、それでいて風通しがよくて、なんていうのか、いい温泉に浸かった後のような快さがあります。

多田 まあ、当時はそこまでわかって、やっていたわけではないけどね。ふたりが、ただ愛し合いたい、君を好きでいたいだけなのに、そのふたりを取り巻くいろいろな社会の矛盾や問題に、結局は向き合わないではいられなくなる様子を、3~4 分の曲の中で形にしているわけですね。そのあたりはもちろん、浜田省吾や尾崎豊などの影響もあるわけだけど、そうしたモデルに忠実に、かつ自分を表現してみたのがこの歌ですね。

そういえば、ヤスバージョンの歌詞をつくって、歌ってくれたことがあったよね。シュプレヒコールのところを、よりマイルドにナチュラルに作り直してくれてて、作品としてはそのほうが普遍性があるわけだね。だけど私のオリジナルバージョンは、やはり先に示した制作時の個人経験の事情から、この形が自分的にはナチュラルだったということですね。

多田 ところで今回思い出したのだけど、この歌、最初は前奏があったんですね。C⇒D⇒C⇒D、そうして G から。ピアノが入ったからか、前奏がなくなり、いきなり歌い始める形になったんだね。

井坂 多田さんの曲は、詩と音楽が完璧に噛み合っているところが好きです。言葉も広い

意味では音楽だと思うのですが、素材のもつ韻律が生きていると感じます。朗唱するように、言葉のもつ自然なリズムと勢いを殺さないように、繊細で温かみある風ですね

多田 なるほど～。それは嬉しいご指摘です。最初は詞が先だったと思うけど、途中から曲が先、もしくは曲と合わせて言葉が出てくる、そのような作り方になっていきました。しかしまあ、自分で言うのもアレだけど、けっこう今聴いても意外と、まずまず聴けるってのが、正直驚きです。

バブルの残照

井坂 浜田省吾や尾崎豊にかぎらず、高度成長からバブルを経たあたり特有の生活実感、それは簡単に言うと「私たちは確かに物質的には豊かになったけれど、何か大切なものを置き忘れてしまった気がする」みたいなものが歌われていた気がします。そのあたりはいかがでしょう。今となっては全体に窮乏化しているので、ずいぶんぜいたくな悩みのように感じられなくもないのですが。それでもあの時代はそれなりの切実さをもってそう感じられていたのですね。

多田 いやあ、全くその通りです。公害～環境問題で、害や矛盾を外や周縁地域に転嫁しながらの豊かさ、明るさ。直接には 80 年代から引き継いできたのが、この時期でした。圧倒的なモノの力、物質的豊かさを享受。世界経済的にも、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の立場に立ったことは、生活感覚においても大きかったのではないのでしょうか。今の感覚からすると、ちょっと想像がつかないような気もしますね。

いまは貧しくても貧しいなりに、モノの豊かさも利便性を増し、安く手に入る。当時は豊かであること、裕福であることそれ自体が大事であり、裕福な立場を確認することが大事だった。そういう時代ではないのでしょうか。

井坂 本当にそうですね。害や矛盾は巨大なほうきでちりとり回収されて、見えにくいところに廃棄されていただけなんですね。

多田 作品・素材に基づく濃密 90 年代論！や～っぱ、本にしたいですね。

井坂 そうですね。90 年代は本当に特殊だったと思います。その特殊さは、一見するとなんでもない無感覚さに支えられていたのだと思います。知らないところで何かが起こっているけれど、それを徹底的に見えなくしてきました。それを「戦後」と呼ぶのかもしれない。戦後とは「安定のシステム」構築に莫大なコストをかけ、労力を費やして、見えないようにしてきた涙ぐましい努力の産物でしたが、その矛盾がとうとう 90 年代後半に爆発して、システムは維持できなくなる。そう見ると、「安らぎのない街で」は予言的に未来を歌いこんでいる曲のように感じられますね。

今にして思えば、あのころ、豊かでしたが、どこか人はいらいらしていましたね。ざわざわするとか、相手のいないボクシングを戦っているような。ちょうど尾崎の「核」という曲にあのえもいわれない感覚がよく表現されていると思います。「目的もなく争い」ですね。

多田治、虚飾の東京を歌う

多田 お待たせしました。それではみなさん、ご用意がととのいましたので、お聴きください！「安らぎのない街で」。1991 年 2 月。

〔付録音源〕オリジナルソング「安らぎのない街で」 1990 年作（大1・20 歳）
作詞・作曲：多田 治 ピアノ：上出 審良 1991.2.24@世田谷ガソリンアリー
<https://youtu.be/jeqVKxCYaMQ>

（曲に耳を傾ける）

井坂 美しき魂の咆哮。

多田 ふふふ。ありがとう。本は CD 付きでいかが？

井坂 いいえ、本つき CD です！

多田 そ、そうか！（笑）そうそう、思い出した。「虚飾にみちた」。たしか、サークル紹介誌に書いた言葉です。これも、いまはまず使わない言い回しですが、当時は時代を表すキーワードだったかと思われます。

井坂 虚飾、よく覚えています。とても強い言葉です。バブルにまみれている社会を自己批判するニュアンスを感じますね。当時は長渕が日本の金満化へのプロテスト的な曲を多く歌って—それで自らも金満化したはずですが笑—いた気がします。というか、若者向けの歌にはなにがしか社会批判的な視点があった気がしますね。多田さんのラブソングにもその要素は濃厚にみられると思います。

多田 プロテスト系には、もちろん影響も受けたけれども、限界も感じたというか、やはりそれだけでは、作品の域まで高められない、昇華できないんだよね、少なくとも僕の場合は。この歌の中でも、シュプレヒコールやエゴイズム、「どこかの争い」などは、それそのものよりも、そういう状況や、そこにいた自分を対象化・客観化していたのでした。この歌でも、真のテーマは豊かさ・虚構性・生きる意味・安定のシステム・疎外、そして安らぎ。直接的な反抗・政治・運動よりもっと抽象的でトータルな、「東京」という巨大な構築物への根源的な違和感であったかと思っています。

政治や運動そのものに直接、積極的にコミットできなくて、社会をとらえる方向へむかった自分の志向性は、政治学から政治思想、さらには社会学へとシフトし、西早稲田キャンパスから戸山キャンパスへと移動した選択に、表れていたのでしょう。

90 年代の東京

井坂 確かに東京という圧倒的な構造物への違和感は隣県出身者にさえありました。今でこそ私の故郷は渋谷まで一本で行けますが、90 年ごろ渋谷というと月の裏側より遠かったです。バブルの狂乱も、東京のトレンドイな空気も、まったく無縁でした。それもあって、高校を出て都心に通い始めたときは、異様な世界に来たと思わずにいられませんでした。

ただ、女性が綺麗だなと思いましたね。これは東京は特別な空気というか、姿勢を知らず身につけさせてしまうのだらうと感じました。今でも 90 年代ほど女性が綺麗だった時代はなかったのではないかと感じます。私がそう思っただけかもしれませんが。

多田 あの時期は、東京とそれ以外では、たしかに女性のおしゃれや化粧にも差があったでしょうね。その後、地方がどんどん東京化していったというか、差がなくなっていくのではないかな。いまでは東京だからといって、そこまで気合いを入れるとも限らない気もするし。当時はずいぶんと、「東京の気合い」のようなものが求められたのかも。

井坂 本当におっしゃるとおりです。東京の気合いがありました。あの頃は日本全体が小さな沼のような生態系で、東京は自他共に認める最高位でしたが、今ではごく通常にニューヨークや北京やベルリンが身近なので、東京は当時の地方都市を見るように感じることもあります。比較対象によって見え方が変わるということなのでしょうが、一方で東京はやはり独自の進化を遂げているようにも見えます。まずいたずらに規模が巨大で、内向性の強い都市になったように感じます。うまくいえないのですが。

つまらないことなのですが、当時ブーツのデザインが美しかったのです。冬になると街行く女性のブーツを眺めるのが楽しみでした。今は見かけないですね。とても寂しいです。

多田 たしかに、冬の風物詩でしたね。

井坂 「安らぎのない街で」を作っていたときのことで記憶されていることはありますか。感情でも、思考でも、世の中の動きでも、ちょっとしたエピソードでも、どんなことでもいいので教えてください。

多田 この曲に即しては、ひと通り出尽くした感がありますが、他の曲を出せば、またいろいろ言えそうではあります。もし同人誌に載せていくなら、1号に1曲分がちょうどいいかなと思うので、ペース配分もありますよね。曲でなく、当時を時系列でたどる作業をすれば、もう少しいろいろ思いつくかとも思いますが、どれぐらいのペースや濃度でいくのが、妥当でしょうかね。

「安らぎのない街で」を聴いての感想

那波泰輔 過度に虚飾された東京という街で信じられるのだけは君だけというのは、ある意味で00年代のサブカルチャーとも親和性があるように思いました。00年代のサブカルチャーでは、世界の破滅が生じても君と僕の世界を重視するいわゆるセカイ系が流行りました。そしてセカイ系の作り手の中心は、バブル期に青年期を過ごした人々が多かったと思います。「君の名は」で一世を風靡した新海誠監督もバブル期に青年期を過ごしており、セカイ系の代表的な監督として知られていました。90年代の思想がサブカルチャーという形態で00年代の青年に受容されたのは非常に興味深いことだと思います。

「君」に対する想いと、繁栄を疑わない社会への苛立ちに対して、敢然とした態度が先生の歌声から伝わりました😊

荒井悠介 「安らぎのない街」に描かれているような、「東京」の虚構性、(おそらく経済と華やかさを基軸とした)「豊かさ」という生き方の価値観、そしてその中での孤独感、そういったものへの強烈な違和感、そしてその絶対的な強さは、82年生まれの私も90年代中頃から2000年代中頃位まで感じていたため、とても共感させていただきながら拝聴させていただきました。この曲が創られた90年代初頭は特に、「東京」らしさが際立っていた時期だと思うのですが、恐らく東京という街が「東京」であった時代の多くの若者が感じた普遍的な違和感を表してくださっているように感じます。違和感、怒り、愛情、救い、そんな様々な感情が歌、ピアノとギターの高まりと共に表現してくださっているように感じさせていただきました。

少し自分のことも絡めますと、1982年生まれの私にとって1991年はさすがに子供過ぎ

て、社会の複雑さはわからず、バブル景気の華やかな時代だったという印象です。

ただ、ルイ・ビトンの財布や渋谷に憧れる周りの女性が中学生ながらに援助交際をしていることに傷ついていた 1996 年頃。このころからこのような、女性達、そして自分達も巻き込まれる「東京」という空間や価値観への違和感はとても強く感じていました。

そんな頃、私はその違和感をうまく言葉にはできず、ベスト盤が出て知った尾崎豊の「街の風景」、「僕が僕であるために」、「愛の消えた街」などの曲を聞き自分の心を代弁してもらっていました。これらの曲を聞いた時のような感覚をふと今回の曲を拝聴して感じさせていただきました。そうとらえると、尾崎が 80 年代初頭にうたった「東京」の違和感、「安らぎのない街」に描かれた違和感、私が感じていた違和感にもとても連続性のあるもののように感じます・・「東京」という街がその象徴的な力を失ってきている今、若者はどのように「東京」や「君」を捉えるのか・・、そんなことを深夜に少しセンチメンタルに考えてしまいました（笑）

萩原夏花 感想が遅くなってしまい大変失礼致しました。私ごとですが一昨日無事に卒論の方提出できました。ご指導誠に有難うございました。今後とも何卒よろしくお願い致します！

先生が「安らぎのない街」で描かれているような「街」を感じられるようになったのは、ここ 5.6 年のことのように思います。千葉県の子供時代に住んでいたこともあり、どこか「街」はいつも煌びやかで華やかで憧れを感じる場所だと思い込んでいました。歳をとるにつれ、いろいろな人間関係の中で「社会」を考えるようになり「街」の感じ方は大きく変わったように思います。時に安らぎを与えてくれる「街」、時に寂しさや悲しみをみせる「街」など様々です。

1995 年に生まれたため、当時の社会の雰囲気などは記憶にないのですが、曲を通しその時のことを想像しながら聴かせて頂きました。

最近の自身の経験に絡めると、クリスマスシーズンで特に華やかさなどが強調されている街の様子を横目に、卒論の進捗や、それ関連の種々の大学の中でのしがらみが頭を過ると、華やかな雰囲気とは大丈夫的に心は虚無感に包まれておりました。そのようなタイミングで聴かせて頂いたこともあり、大変、歌詞やメロディーが染み渡りました。